
雨音の行方

はしもと なおや

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雨音の行方

【著者名】

はしもと なおや

【あらすじ】

雨宿りをしている喫煙所で君に出会つ。

雨。

JR町田駅の改札を抜け。歩く速度とともに心拍数が高鳴っている。

僕は雨が好きだ。心にしみ入り、僕の隙間を埋めてくれるようで。雨のせいでやけに感傷的になる瞬間も好き。僕が雨と一体になつている感覚。

そんなことを考えながら君との待ち合わせ場所へ急ぐ。とりあえず高校時代の彼女が好きだったロクシタンの匂いを漂わせるルミネを横目に見ながら北口を出る。そして、橢円形と言えばいいのだろうか、とにかく何を表しているのか分からぬ回るオブジェの前を通り過ぎる。このオブジェ前は待ち合わせの定番の場所でこんなに雨が降っているにも関わらず意外と人がいるらしい。それぞれにそれぞれの理由があつて待つているんだよな、と雨によつて感傷的になつたせいかと思つ。あの金髪でキヤバ嬢みたに派手な女の人は彼氏を待つてゐる、あつちのおばあさんは孫かな、この相当盛り上がつてゐる集団は合コンかなにかか、など雰囲気から想像する。みんな理由は違えど特別な思いを抱えている。

強く雨が降つてゐる。アウトドアのバックパックから折り畳み傘を取り出そと立ち止まる。

僕も君を待たせてゐる。どんな気持ちで待つてくれてゐるのだろうか。相当怒つてゐるのではないかと少し心配になる。そういえば君と初めて会つたのもこんな雨だつた。もしかしたら、君は誰かを待つていたのかもしれない

*

僕は傘を忘れて雨宿りのために喫煙所に駆け込んだ。僕は煙草なん

て大嫌いだつた。バカ高くて吸つても自分の体を壊すだけ、なんて本当に意味がない。なにより匂いが嫌いだつた。まだ幼稚園に通つてゐる頃、ベースモーカーの父に憧れ火についてない煙草を吸つてみたが、あまりにまずくて泣いてしまつたという思いでしか残つていらない。それが原因ではないだらうが煙草は吸わないと決めている。

けれど雨宿りのため、しうがなく喫煙所に入つた。遠くから見たときは誰もいないだらうと思つた。でも片隅に、ぽつん、と一人だけ足を組んで座つてゐる女性がいた。細くて、顔つきが凜としたひど。煙草を吸つていたので僕は少し距離をとつて座つた。その煙草を吸つていたのが君だつた。

君の細くて長い指が僕の大嫌いなはずの煙草をなぜかかっこよく見せた。君が煙を吐き出すたびに見せるミステリアスに俯くしぐさ、ひたすらに落ちてくる雨に煙りが混じつていくを見つめる眼差し。このひとも雨が好きなんだらうな、と根拠のない確信が一分もしないうちに持っていた。なんとなく、だ。なんとなく僕と同じ目をしていろと思つた。

降りしきる雨。どうせにわか雨だらう。弱まつたらコンビニに行つて傘を買おう。傘で五百円はきついな。でもこの雨じゃしようがない。雨の日は眠くもなる。これは動物としての本能らしい。無駄に疲れる。そんな雨。

ふと、君の横顔を見る。

なぜ、なんでこのひとはこんなに悲しそうな顔をしているのだろうか、そう思つた。雨の音が僕を洗脳するかのように頭に響いてくる。僕は君の横顔から空へと視線を移した。

「雨だ。」

君の声は雨の音と混じり合つて聞き取れなかつた。まだ悲しそうな顔をしている君の顔に目を向ける。

「ふふ。」

僕は驚いた。君が笑つたことにではなく、悲しそうな顔のまま笑う

「とにかく。しかも、ばかにしたように鼻で笑う。僕は声にならないような（え）といつのような声をあげていた。

「つづん、雨音つて悲しくなるよねって。」

「悲しく、ですか。」

「なんとなく。」

僕はそこで黙り込んでしまった。なんとなく、か。僕もなんとなくはわかる。でも言葉で言い表せないから口を開けない。とりあえ「はい」とだけ言って、また雨の落ちてくる空を見上げた。雨は少しだけだけど弱まっていた。この調子ならもう少しだけ待てば止むかもしれない。

「傘、忘れちゃってね。」

君はベンチの端から少し近づいてきていた。煙草の煙が嫌だ、と僕は少し引いてしまった。

でも、そういうえば傘が見当たらない。だからここにいたのかと、やつと気付いた。僕もいつもなら折り畳み傘をアウトドアのバックパックの中に入れているのに前日に違うカバンに入れたから忘れてしまった。

「すごい…すごい雨ですよね。」

僕の顔はひきつっていた。君は僕がこの喫煙所に入ってきたて2本目の煙草に火をつけていた。ジッポでつけるのがかつこいい。歳はいくつぐらいだろうか。二十歳の僕と同じくらいにも見えるけど煙草を吸つてるせいか大人びて感じる。

「煙草は？」

「いや、まあ。」

煙草を吸えないのに喫煙所へ入つてきたのを後悔した。いつそのこと、そここの自販機で煙草でも買ってみようかと思うくらいだ。もう二十歳だし問題はないはず。いやタスボがない…僕は焦る。

「え、何？」

君は肺にある煙草の煙を全て出すよつこぶーつ、と吐き出した。少しこらだつて見えた。

「あ、いや……はい。」

「だから、何?」

僕は少しひっくりして

「あ、えっと、吸えなくて。雨宿りでここに来たんです。すいません。」

なぜだか謝っていた。

「ああ、『ごめん、『ごめん。』」

そう言うと君は灰皿にまだ火をつけたばかりの煙草を押しつけた。ジュウという音が響いた。

気がつくと雨はずいぶんと小ぶりになっていた。そのせいか歩く人も増えていつの間にか喫煙所には人が増えていた。煙草を吸うおじさんたちをみてこっちが入ってきたのが悪いんだよな、と冷静に考える。

「私、雨好きなんだよね。」

「はい。」

なにか気のきいた言葉でも出せればかつこよかつただけどできなかつた。しばらく沈黙が続いて気まずくなつた。雨はほとんど止んできてもう傘もいらないくらいだ。

「いつしょにどつかないかない?」

僕が今さつき妄想していた言葉が君から出た。雨の音が聞こえなくなつた代わりに僕の鼓動の音が速まつているのが分かる。

どこにいくでもなく街をぶらぶらしていた。相変わらず僕はどうしていいかわからず君の話に無愛想な相槌を打つだけだった。でも、君は雨についていろいろ話してくれた。雨の日を好むひとと嫌うひとがいるけど自分は好きだということ。音とか匂いとか、空気とか。それと昔の恋人と箱根にドライブをしにいったときに行きなりの雨で最悪だったということ。でも、帰り道にきれいな虹がかかること。その恋人との別れた日も雨だったこと。でも梅雨の時期の雨は嫌いだとか。あと、雨の日は泣きたくなるって

「煙草を吸いたい」と君が言うのでまた別の喫煙所に入った。小

田急のほうの喫煙所だ。大きな水たまりには肌では感じられないくらいの雨粒が波紋を作る。

「僕、こういうの好きですね。雨が止んだっていうか、えっと、なんていうのかな。」

「わかる。」

ぽつり、君が言った。今思つとこんな言葉じやわかるはずもなかつたと思う。けど、奇跡的に伝わつたと思い、僕は君を好きになった。

*

忙しなく流れる人波が僕とすれ違つたり、追い越して行つたりしていく。僕は空を覗く。雨はまだ降り続いている。

君が悲しい顔をしていた理由は分からぬ。でも僕は知らなくともいいかなと思う。

多分話してくれた昔の恋人のことかとも考えたけれど多分違う。もしかしたら他の人があの日の待ち合わせに来なかつたのかもしねない。でも、そんなこと知らなくていい。

僕は君の悲しい顔が好きだ。もちろん笑つた顔だつて、真面目な顔だつて好きだ。全てが好きだ。だから、そういう君がいることを素直に受け入れようと思う。僕にはそれしかできないから。

あの日まで雨の日はどこか憂鬱で心の隙間を広げていくものだと思つて大嫌いだつた。だけど、君が好きな雨だから、君の好きな匂いだから、君の好きな音だから。だから、僕は雨を好きになつた。これからもつと好きになるだろつ。ポケットのなかの携帯が震える。

僕は折り畳み傘を広げて喫煙所へ向かう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8183q/>

雨音の行方

2011年10月8日18時09分発行